UFOと宇宙哲学の研究誌

コズミック ニューズレター

NO. 42

ジョン・サール氏の宇宙艇 …… L・ベルンハルドソン 1
サールの逆重力宇宙機 …… 村雨光之助 4
宮内・古山両君歓送会 …… 6
トピックス …… 7
なぜ彼らは来るのか …… F・ステックリング 9
日本GAP大阪支部大会開催 …… 20

日本GAP

ジョン・サール氏の宇宙艇

ラルス・ウノ・ベルンハルドソン

以下の記事はスエーデンのジョン・サール協会代表ベルンハルドソン氏がもたらした驚くべき報告であり、これによればすでに反重力場宇宙船が実現していたということになる。これについて村雨氏が論評しているので併読されたい。（編者）

一九四九年に英国のジョン・R・R・サール氏はミドランズ電気局に電気関係組立工として採用された。彼は正規の教育を受けなかったけれども、電気の問題についてはきわめて熱心であった。電気に関する旧来の考え方にわずらわされることなく、彼はその問題に自分の研究を盛り込んだ。電気モーターや発電機などを扱っているうちに、メタルパーツを回転させることによってわずかな電力が発生することに気づいた。外方にむかってマイナス、回転軸にむかってプラスになるのである。一九五〇年に彼は回転滑動環について実験し、メーター上にわずかな起電力を測定した。またこの環が自由に回転しているとき、電流が流れていないのに、髪の毛が逆立つことに気づいた。

彼の結論は次のとおりであった。すなわちその金属の自由電子が遠心力によって投げ出され、金属内の静電場によって求心力が生じるのであると。彼はこの原理に基づいて発電機を作ることにした。それは分割された円盤型回転子をもち、その周囲は電磁石の中を通過するようになっていた。この電磁石群は回転子によって刺激されて起電力を高めるように設計された。

一九五二年までに最初の発電機が製作されたが、これは直径約三フィートあった。それはサールと一友人の手によって野外でテストされた。アーマチュアーは小さなエンジンによって動かされた。この装置は期待どおりの電力を生じたが、予想以上の高電圧を生じた。アーマチュアーのスピードが比較的低いときは近くの物体上の静電効果によって示されたように、10万ボルト程度の電圧が生じた。特有のパチパチという音とオゾンのにおいが前述の結論を確証した。

すると全く予期しない事が起こった。この発電機の回転をスピードアップしているうちに空中に浮かび上がったのである。発電機自体とエンジンとの結合部分を切断して、約50フィートの高度に上昇したのだ。しばらくそこに停止したが、なおもスピードアップして、周囲をピンク色の光輪がとり巻いた。これはうんと減圧された10ミリHgにおける大気のイオン化を示すものである。更に面白いのはラジオ受信機が自発的に鳴り出すというサイド効果であった。これはイオン化放電または電磁誘導のせいであったのかもしれない。ついに、そして有難いことには、発電機全体がすさまじい速力で加速されて宇宙空間に飛び去ったと考えられている。

その日以来サールと他の人々は10個以上の小さな飛行艇を作ってきたが、そのなかには同じようにして空中で失われたのもある。それで彼らはコントロールする方法を考え出した。直径12フィートや30フィートもある大型の飛行艇も製作されている。

彼の機械の異様な動作は、いわゆる〝空飛ぶ円盤〟の性質や起源について多くの憶測を生み出した。サールが広く科学者たちや一般人の注目を浴びない理由を人はいぶかっている。だが事実は次のとおりである。彼は注目されているのだけれども、人々は嘲笑されるのを恐れてサール氏の事に関しては語らないのだ。一般人は空飛ぶ円盤問題を軽べつするように教育されている上に、円盤の不思議な活動は現在の科学理論では説明がつかない。このような〝説明の困難な〟トピックス（たとえばテレパシー、鉱脈占い、ホメオパシーによる治癒等）は〝ノーコメント〟の扱いを受けるが、これは現在の科学理論の不安定な構造をくつがえさないようにするためである。

しかしサールの記録は彼の努力が認められてきたことを示している。政府の各部門、あらゆる階層や教育の人々が彼について知っているのである。なかにはサールのアイデアを盗もうとした者もあったが、旧来の電磁気理論と質量とエネルギー不変の法則〟に沿った考え方を固守したために、うまくゆかなかった。この狭い考え方によって多くの人はサールを奇人かペテン師と思うようになっている。サールは動力線や向う見ずなモータリストとしての遊びなどよりももっと重大な事柄をもたらすのではないかと思われる。そうなったら従来の古臭い学説の遵奉者は既存の学説とサール効果とを結びつけるか、それともアンペア、ガルバーニ、ボルタなどの物理学上の学説の完全な没落か訂正のいずれか一方に従わねばならなくなるだろう。

サール効果

(1) 反重力現象、すなわち無重量状態

(2) 非常に強力な静電場の発生

(3) 奇妙な磁気効果

発電機はリムの所に陰極、中心部に陽極の直流静電場を生じじる。しかし発電機から生じる磁場は、伝導ループに相対的な運動がない場合に電磁誘導を生じる。この効果は電気器具の（　）の中に見られ（注＝上記カッコに相当する個所に文字が脱落している）、或るクラブが作ったＵＦＯ探知機に応用されている。この装置は閉じられた伝導ループのたわみ磁力計であることが判明した。ＵＦＯが出現すると、N↑↓S線の磁石のふれによってそれが示されるのである。

ゆえに、発電機の磁束は絶えず膨張しているらしい。このことは無限のエネルギーを暗示している。

(4) 永久運動

一度この機械が一定の電圧の〝しきい値〟を越えると、エネルギー出力は入力を超過する。その時からエネルギー出力は実際には無限となる。これは機械が太陽エネルギーを集めるからだとサールは説明している。この推定工率は約 10^{14} ないし 10^{16} ワット程度である。

(5) 慣性の消滅

約 10^{13} ボルトと思われる電圧の〝しきい値〟以上になると、この発電機と付属部品等は慣性がなくなる。このことはもちろん従来の慣性の概念と一致しない。

(6) 推　進

船体表面の電圧の分布を変えることによって、推進が可能となる。超高速での進行方向は惑星から離れる方向になり、船

体の平面は重力場に対して九〇度となる。水平飛行をする時は船体は重力場に対して或る角度をなす。これはベクトル場（複数）間のバランスを思わせる。

(7) 空気のイオン化

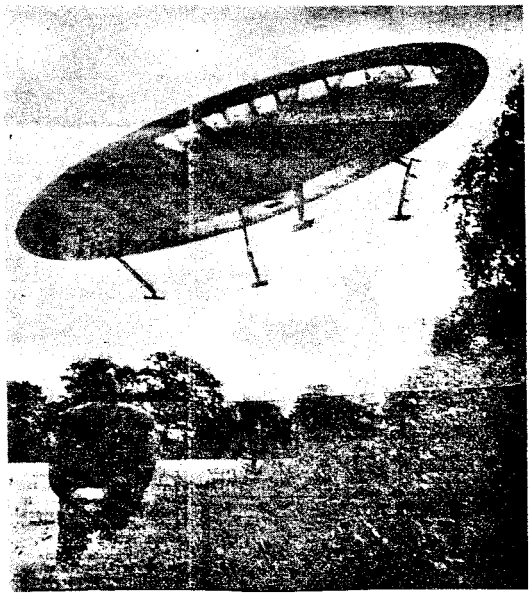
これは簡単な静電効果である。これによって船体の周囲に半透明な輝きと光る尾ができる。この場の強度は非常に高いので船体の周囲のイオン化空気を排除して疑似真空を生じるほどである。

(8) 永久分極

サールは船体の近くで作業したあとで、皮膚に〝クモの巣〟がかかったような感じがしたことに気づいた。着ている衣服やベッドの敷布などが身体にくっついた。これはときどきパチパチという音が伴い、しかも数時間も続いた。この現象は誘電体の永久分極のせいだといえるかもしれない。この場合その物質とは肉体の組織である。永久誘電体についてはこれまでにほとんど研究されていなかったが、一九二〇年度日本物理数学協会（注＝この訳は正式な名称ではないかもしれない）の記録に研究報告が見られる。この研究は東京の海軍大学のエグチ教授によって行なわれたものである。米国の或る会社は静電ラウドスピーカー用の永久エレクトレット物質を現在開発中である。

(9) 加速中の物体ひったくり現象

これは船体が地上にあって、不意に推進のスイッチが入れられる時に起こる。船体が上昇する際に一塊の土を取り去るので、地面には円盤着陸事件でよく知られている〝穴〟が残る。



ジョン・サール氏と彼の製作になる宇宙艇。空中に浮上している。

サールの逆重力宇宙機

村雨　光之介

英国の電気工学者ジョン・R・R・サール氏が、私の理論と同じ逆重力宇宙機を写真の如く、約10億円を掛けて完成しました。其の工率は、10^{14}ワット程度であって、超相対性理論の理論値（文献1）（U＝5トンと考えて）と、大体一致します。又、電圧は、10^{13}ボルトですので、超相対性理論の理論値（文献2）より、やゝ高いのですけれど、コイルの巻数が多いと考えれば、大略一致します。恐らく、反粒子機関と同じ物でありましょう。又写真＃1の上方に在る光採及び写真＃2の下方に見える光点の列（文献3）は、《実見記》の巻頭写真の金星のスカウトシップ（文献4）と同様の物と思われます。恐らくUFOとも、同原理と思われます。写真＃1は、左下方に製作者のサール氏がたゝずんで居ります。日本より金持の国である英国とは言え、10億円集めるのは大変であったのでしょう。クシャクシャの顔で、成功を喜んで居ります。此の宇宙機と超相対性理論の《反粒子機関》の主な異りは、前者が electro-mecanical な手法で、直接ローターを回転させて居るのに対して、後者はコンデンサは固定して、電磁場を変化させて、回転電場を作り出し、ローターの回転と同様の効果を出して居る事です。ブラザースは、後者の手法です。此の点で、サール氏の宇宙機は、やゝ地球的、原始的では有りますけれど、何はともあれ、トラック大の機体が浮上したのは、驚嘆すべきです。実は、サール氏は今後の改良に、是非小生の理論を適用させて呉れと言って来て居り、協力する事に致しました。《天は二物を与えず。》と言いまして、理論の憐能な私は実験が未だしであり、サール氏の方は兎にも角にも、実験に成功して、理論の方は後廻しであった様です。幸い、超相対性理論は、米国航宙局のフォン・ブラウン博士の許にも、米国大統領のニクソン氏の許にも行って居りますので、更にサール氏の工学的成果が加われば、此の4者が協力して、地球の宇宙開発も、ブラザースの水準に遠からず追い付くでしょう。尚サール氏は、イギリス宇宙研究協会（National Space Research Consortium）月旅行株式会社（Lunic Enterprises Ltd）を組織して、事業を押進めて居ります。其の日本支部長に、小生を指名して来ましたので、引受ける事に致しました。今後共、皆様の御支援を御願申上げます。

サール氏が38才、私が34才でして、彼は4才の先輩であり、研究歴にして5年の差がありますけれど、向う三年間に私自身の宇宙機も写真の程度迄持って行きたいものです。久保田会長の資金カンパの呼びかけに、数名の会員が応えて下さり、御蔭様にて模型の改良と、新しい駆動機を製作中です。誌上を借りまして厚く御礼申上げます。尚、《反粒子機関》を（Invorse(Anti-)Atomic Motor と二様の呼称を用いましたけれど、正しくはInverse Atomic Motorの方でしょう。サール氏の場合も Inverse ですし、高知の物理学会年会（文献5）にても、逆重力は、反粒子の裏の状態であるとの結論が、多くの物理学者の知恵を寄集めた結果でした。即ち、(A)正エネルギ　の占有状態　(B)負エネルギの非占有状態　(C)

正エネルギの非占有状態　(D)負エネルギの占有状態の4種類の存在の理法が有るけれど、(A)及び(B)が従来の物質と反物質であり、(C)及び(D)が、物質が、物質及び反物質の裏の状態です。後の二者が負エネルギで逆重力を有するのです。其の実現の仕方は、超相対性理論に詳述致しました（文献6）（未完）。

参考文献

1）村雨光之介、超相対性理論、二宮工房（一九六九）一二一。

2）＝1）一一五。

3）Phil Sanders Hants & Berks Gazette, Friday, July 4(1969)26,

(4) G・アダムスキー「空飛ぶ円盤実験記」　高文社（一九六九）巻頭写真

(5) 久保田八郎　GAP　NL＃四一（一九七〇）編集後記

(6) ＝1）六三

追　記

最終的に月へ八名の乗員を送るサアルの宇宙機は直径四十五メートル、高さ5メール八〇センチメートルであって、彼は現在其の原型機二台を調整中であるとのこと。又、キャビンの気圧は一平方センチ当り五ポンドから七ポンドの間を変化するように設計し、これに二年を費したとのことである。

〔編者注〕

村雨光之介氏の論評によってもわかるとおり、ジョン・サールの宇宙艇建造は高度な科学的理論に基づいて行なわれたようで、いかがわしい物語りではないようである。

これについては、村雨氏から非常にしばしば編者宛に報告が寄せられており、その内容は科学者らしい理路整然としたものであった。しかし他国の研究者に一歩を越されたことは、われわれにとって残念なことだが、村雨氏はいささかも羨望嫉妬することなく、むしろサール氏に対力的態度に出られたことは注目に価する。そして村雨氏は冷静に自己のペースを守り、いつかは独自な宇宙艇の開発を完成させるつもりであると述べておられた。

いつの時代においても先駆者の偉大な発明発見が当初は同時代人から冷笑無視されることは多くの実例が示すとおりである。もちろん、なかにはいかがわしいエセ科学者もいるだろうが、真偽のほどは時間の経過が証明するであろう。

村雨氏と編者との交際はかなり古く、同氏が東大大学院に在学中編者宛に手紙をよこされたのがその始まりである。ソダムスキーの〝空飛ぶ円盤同乗記〟をよんで大いに得るところがあり、それを参考にして反重力エンジンの開発を研究中だとのことであった。以来氏は黙々として探究の道を歩み、あらゆる毀誉褒貶に対して全く無頓着な態度で自己の信念を貫いてこられた。驚くほど誠実で、純粋な魂の持主である氏は、まさに二十一世紀の化学を背負って立つパイオニアーにふさわしい学究である。サール氏の業績もさるたとながら、村雨氏が日本人のために万丈の気を吐かれる日の近からんことを祈るものである。

宮内・古山両君歓送会

去る四月十八日に日本ＧＡＰ幹部、宮内温夫・古山晴久両君のカナダ行き歓送会が豊島振興会館にて盛大に開催された。

この日午後六時より会館の中会議室に出席者十五名と両君を加えた計十七名が集合。久保田代表の挨拶と謝辞が行なわれ、そのあと宴会となって一杯やりながら各自隠し芸を披露に及び、和気アイアイたる雰囲気のなかに九時半万才三唱によってめでたく終了した。この日は商業美術家たる宮内君制作のアダムスキー講演ポスター〝生命の科学〟と〝死と空間を超えて〟のすばらしい原画が会場に展示されて注目を浴び、また古山君が挨拶の折に、自分は宮内さんのためなら命を捨ててもかまわないと発言して出席者を感動させた。両君は同月二十五日羽田空港よりカナダ航空にて出発、無事目的地に着いて元気で暮しているとの由、まずは一安心である。歓送会の出席者は次のとおり。（敬称略）

石川哲之助（会社員）、水谷　進（埼玉大）、田崎　忠（塗装業）
韮沢潤一郎（会社員）、牧野繁雄（公務員）、安斉純夫（地方公務員）、増田幸雄（会社員）、山本佳人（東京芸大）、篠木裕二（東海大）、竹島　正（東京教育大）、小宮豊隆（大正大）、中山正史（東京工大）、三田堯一（高校教員）、羽鳥雅己（中学教頭）、久保田八郎（日本ＧＡＰ代表）

無料贈呈!! 宮内君の渡加を記念して後援会より同君制作絵画の写真集が刊行された。収録された十一点の画はすべてアダムスキーの哲学に関連のある神秘性のあふれた秀作ばかりで、久保田代表が　Marvels of Beauty by Miyauchi　と題する英文の解説を書いている。希望者には無料贈呈するので、35円切手を同封の上、ＧＡＰ本部久保田代表宛に申し込まれたい。

（Ｊ・Ｎ）

アリス・B・ポマロイ（注＝米国GAP幹部）女史から今年五月二十七日付をもってよこした連絡によれば、左のような興味深い出来事がメキシコで発生したという。

最近マリア・クリスティーナ・ルェダ（注＝メキシコGAPリーダー）から来たアリス宛の書簡で、次のニュースを世界GAPのみなさんにお伝えせよとのことであった。

「こちら（メキシコ）で発生した出来事についてお伝えしたいと思います。ペドロ・フェリス氏という人がテレビで円盤関係の番組を担当しています。先週氏は私を彼の自宅へ招待してくれましたが、これはアレン・ハイネック博士とスペイン人円盤研究家のアントニオ・リベラ（注＝FSR誌の通信員でもある）の二人が二、三の番組に出演するために当地へ来ていたからでした。それで重要事というのは、この二人がひそかにフェリス氏に対して「一般人はアダムスキー氏のコンタクト物語をもっとまじめにとらねばならない。なぜならそれは真実のコンタクトであったのだから」と語ったという事実です（注＝右の傍点を付した部分は原文では大文字の綴りになっている）。そこでフェリス氏はアダムスキー氏の特別番組を制作することになり、アダムスキー氏に関してあまりよく知られていない事実を知らせてくれというのでした。私を援助して下さいませんか？

更に別な重要事としてハイネック氏は最初のテレビ番組に出て、円盤は惑星間を航行する物体で、地球は大気圏外から来る人々によって訪問されていると語った事実です。氏は更に四種類の番組に出ました。今や多数のメキシコ人がこれらの番組によってハイネックやリベラなどがアダムスキー氏のコンタクトについて解説した内容を知っています。この二人は元はアダムスキー氏の敵でしたが、今は考えを変えてよき友となったのです」

アレン・ハイネックは米空軍のUFO調査機関の顧問であった人で、円盤存在の否定論者として名高く、特にアダムスキーの円盤写真をインチキとしてとことんまで攻撃した学者だが、それが百八十度の転向を示したとは驚くほかはない。

＝トピックス＝

アレン・ハイネック、アダムスキーを支持！

宮城県で円盤を撮影

四月四日午後一時十五分頃、宮城県立栗原農業高校一年の菅原真作君（一六）が、自宅の庭から東側にある種米山の上空にカマを二つ重ねたような物体を発見して、ただちに写真撮影に成功、これを東京天文台に送った。これは先般マスコミをにぎわし、その写真の真偽をめぐって議論百出したようだが、同校の校長や化学担当の鈴木教諭は同君のまじめさに太鼓判を押しているという。

日本GAPも調査のメスを入れたが、本号の原稿締切時間までに間に合わなかったため、この件に関してはノーコメントである。夕刊〝フジ〟に掲載された写真は実に鮮明であった。

植物も意識を持つ

ニューヨークのマンハッタンにウソ発見機技術指導学校というのがあるが、そこの校長クライブ・バクスター氏は或る日ふと植物をウソ発見器にかけてみようと思い立った。それで発見器の電極をサボテンの葉につないで、生命の危

TOPICKS

険を与えれば何か反応があるかもし考えて、サボテンの根元に火をつけった。ところがそう考えただけで何うちから発見機の針が激しく揺れ始ある。これは一九六六年二月のこと以来バクスター氏は植物との〃会話〃続けている。それによると、知人のかった植木の〃心〃が数時間にわたく動揺したので、調べてみたらこの主がちょうどその時刻に目的地の空たことがわかったという。とするとときの緊張した気持がテレパシーで植木に伝わったということになる。またバクスター氏が研究所の門をくぐると屋内にある植物が〃喜びの反応〃を電気的に示すという！ その他の実験によると植物には怒りやねたみの感情まであるらしい。アダムスキーはその著〃テレパシー〃や〃宇宙哲学〃等で植物が意識を持つと言明しているが、これが科学的に実証されたことになる。

れないとようと思もしないめたので、それの実験を女性からって激し植木の持港に着い着陸する

月面には風が吹いている

ベルギーの新聞　La Meuse La Lanterne　一九六九年十一月三十一日付に報道された記事によると、月には風があることを宇宙飛行士が発見したのだという。アポロ12号が着陸してからコンラッドは無電で次のように管制センターへ報告した。「こんなことを言えば誤りだということを私が知らなかったならば、月には太陽風が吹いていると言うかもしれない。だがこの風は（今月面で吹いている風は）テスト・バスケットを違う方向へ向かわせるほどに強く吹いているんだ」これと同じ記事の後の部分には次のように述べてある。「二人の宇宙飛行士が前日月面に設置した小さなラボラトリーは月の大気の存在を確証した」ところが、更に奇怪な事実に言及している。「アポロ12号の飛行中にヒューストンの管制センターにいたドン・リンドがコンラッドに対して君は俺の名を呼んだかと尋ねた。コンラッドが呼ばなかったと答えると、リンドは、たしかに宇宙から俺の名を呼ぶのを聴いたのだがとやり返した。一瞬考えたのちコンラッドは非常に重大そうな口調で言った。『じゃあそれは別の宇宙船から送られた声かもしれない』」

宇宙飛行士はＵＦＯを見た

雑誌 Saga 一九七〇年五月号でガーリ・ヘンダスン博士は、宇宙飛行士のすべてがＵＦＯを見たのだけれども、だれにもしゃべるなと申し渡されていたと書いている。またアポロ12号は十一月十四日に宇宙空間十三万二千マイルの彼方で二機の円盤にとり巻かれたという。二機共閃光を放った。これを裏付けるかのように、ヨーロッパの二個所の大天文台が十四日にアポロ12号のコース付近に二個の光る物体を観測しているという。ヘンダスン博士はジェネラル・ダイナミックス社の宇宙開発研究者として第一人者である。

なぜ彼らは来るのか(1)

フレッド・ステックリング

私はこの記事を偉大な指導者であり友人であったジョージ・アダムスキーに、そして無限の知恵と宇宙の知識、自然の原理等によって、地球の人類に新しい光を与えてくれた別な世界の人々に捧げる。

—筆　者—

序　言

世界中の無数の人々がUFOすなわち空飛ぶ円盤について何度も聞いたり読んだりしてきた。そしてその正体や地球へ来る理由などを考えてきたにちがいない。また現代で最も驚くべきこの事実に全く注意を払わなかった人々もある。

この書において、私は宇宙からの訪問者を人間とみなしている人々の心に植えつけられてきたミステリーのいくらかを解明しようと思う。地球人が公然とその事実を認めようが認めまいが、近隣の惑星群から来る訪問者たちは或る建設的な仕事をするために地球へ来るのである。彼らが空中で何度も目撃されたのは、彼らが実在するからだ。にもかかわらず、世界の各国政府はこの惑星間宇宙船の存在をまだ否定している。しかしUFOに関する政府の秘密事項で理解できるのもある。

我々は近年になって静電気の理論に基づいて作動する固体の物体を空中に飛ばせることを学んでいる。当然このような航空機を研究する人々は、こうした実験を秘密にしたがる。

しかし多数の人々は人口の密集した地域で現実の惑星間宇宙船（地球の官憲にとっては〝説明のつかないもの〟）を映画や写真に撮っている。この種の事件の一つが友人のマドレーヌ・ロドファーにも起こった。彼女はジョージ・アダムスキー氏が居合わせたとき、カメラのレンズから百三十フィートばかり離れた自宅の前庭の上空に滞空した金星の宇宙機を映画に撮影したのである。アダムスキー氏は一九五二年十一月二十日にケァリフォルニアのモハーヒ砂漠で、金星から来た人とコンタクト（会見）したことによって世界中に知られるようになった。この大事件は六名の目撃者の前で発生した。しかも米空軍はデザート・センターの上空からこの歴史的事件を撮影している。

雑誌〝リアル〟の一九六六年八月号で、アダムスキー氏は〝大気圏外の使節〟と呼ばれ、彼のコンタクトの詳細な記事が写真と共に掲載された。

アダムスキー氏は二年前に死去した。彼は惑星間宇宙船やそれを動かす人々に関する多数の書物の著者であった。その書物類には宇宙人の技術、高度に進歩した科学や生命の哲学等が述べられている。「空飛ぶ円盤実見記」はデスモンド・レズリーとの共著である。「空飛ぶ円盤同乗記」「空飛ぶ円盤の真相」（注＝以上いずれも有信堂高文社より邦訳版が出ている）と、自家版の「宇宙哲学」（注＝今秋たま出版社より再版を刊行の予定）は世界で有名になったし、更にアダムスキー氏の撮った8ミリと16ミリの円盤と母船の映画と天体写真もある。一九五二年十一月二十日の歴史的な日から一九六五年の四月まで、ジョージ・アダムスキーは、宇宙人と絶えずコンタクトを続けていた。この宇宙人たちは現在多人数で地球人のなかにまじって働いたり住んだりしているのである。この訪問者たちは主として金星と土星から来た人々である。彼らはアダムスキー氏を通じて我々に多くの知識を与えてくれた。それをアダムスキー氏は著書や、世界の多くの国々で講演、ラジオ、テレビ等によってあらゆる人々に正直に伝えたのである。

〝ウースター・ニューズ〟紙（マサチューセッツ州）の一九六五年三月三十日付には次のように報じられている。

「アダムスキー氏の誠実さとその関心事、及び人類に対する憂慮それにこの地球上における彼の多くの問題に疑いはない。……それは我々に関係のある宇宙船の目撃のみならず、宇宙人がもたらしたよりよき生活法の知識でもある。はるかに進歩した文明人として宇宙人たちは、我々がよりよき世界を作るのを援助できるのである

今日地球上で平和を望まない人間がいるだろうか？

私は宇宙人たちの幾人かと話し合う喜びを得た。私がジョージ・アダムスキーと交際していた当時、宇宙人たちが私に紹介されたのである。男女から成るこの人々は肉体を持つ人間である。彼らの肉体は医学的見地からして我々の肉体と同じである。唯一の相違は彼らははるかに進化していて、自然の法則に従って生きており、地球人のように人間の作った水準や考え方によって生きているのではないという点である。彼らは日々生活を楽しむことを学んでいて、努力のあらゆる分野における新しい考え方に対して常に心を開いている。彼らの知識は原因と結果の法則の徹底的な研究に基づいているゆえに彼らはあらゆる生命との一体感を確立しているのである。彼らは〝信じる者〟ではなくて〝知っている者〟なのだ。

多年に亘って地球へやってきた我々の宇宙の友は、我々の誤った考え方に対して目覚めさせようとしてきたとアダムスキー氏は言っている。彼らは地球人を理解できる。というのは彼らも亦かつては自分の心を訓練して個人のエゴを他人に対する奉仕体に変化させる必要があったからである。彼らは達成することに関心を持っている。ただし自分らのためではなく、万物の向上のためにである。彼らは楽しく愉快な人々であって、立派に行なわれた仕事によって内奥の喜びに満たされている。これは感情的な幸福感ではない。このすばらしい人々は万人に等しく尊敬感を持ちながら真の平等の中に生きている。どのような仕事をするかは問題ではない。ビルディングの基礎を堀る人は尊敬され、建築家や最後に壁画を描く美術家と同じほど高く尊重されるのである。というのは、人間は他人なしに存在することはできないからだ。才能や能力の如何を問わず、万人は等しく尊敬される。なぜなら自分の能力の最善を尽くして遂行することは、どんなふうに物事をやるかではなく、むしろ喜んですることにあるからである。この真の平等性は他の惑星で生かされている。そして読者にはおわかりのように、それは我々が理解しているような〝平等〟と

は大いに異なるのである。彼らは共産主義、社会主義、資本主義、その他の〃主義〃を支持してはいない。むしろ彼らは万人に対する平等さによって同胞に奉仕する共通の社会を有しているのである。

地球上では我々も兄弟愛や平等性による奉仕等に関するすてきな言葉を持っているが、それは大抵の人にとって単なる言葉にすぎず、めったに実行されてはいない。

ここで私が言いたいのは、世界の多くの政府や宗教の指導者は宇宙人とコンタクトしたし、そのなかには今日もなお宇宙人とコンタ

第一章　宇宙船の来訪

一九六六年五月十二日付のワシントンポスト紙に掲載されたギャラップ世論調査によれば、アメリカ人だけで五百万以上もの人が空飛ぶ円盤を見たという。しかも米国のおとなの民間人の半数近くが、この〃空飛ぶ物体〃は存在し、想像の産物ではないと思っているのである。そしてこの調査に参加した人々の三十四パーセントは他の惑星に生命が存在すると考えているというのだ。これらの宇宙船を見た多数の軍関係パイロットや政府の科学者たちをも加えるならば、宇宙船の存在の事実を否定しようとしても無駄であることを認めねばならない。数百万の人々が間違っているわけがないのだ！

宇宙船の存在に関する圧倒的な証拠は、近年世界中の新聞や他の手段によって示されてきた。円盤を見たという無数の信頼すべき人々ーたとえば旅客機や空軍のパイロット、科学者、天文学者、数百万のあらゆる階層の人々ーを我々は疑うつもりはないということにしよう。

また、多数の書物が空飛ぶ円盤について述べているが、少数の例外を除いてほとんどの書物は目撃事件だけを報告しているだけで、ついには退屈になるのである。ゆえに私はこの宇宙船の水中活動に関する少数の報告以外に詳細な目撃報告に言及することは避けようと思う。この目的は、他の惑星の人々は地球の科学者よりも地球の諸変化についてもっと関心があるらしいということを読者に説明することにある。しかも我らの宇宙の友は目下地球が経ているあらゆる変化にまじめな関心を持っているのである。いかなる激烈な変化が地上で起こっても、それは太陽系内の他の惑星群にも等しく影響を与えることになるだろう。というのは、太陽系というものはすべてジャイロスコープ効果にもとづいて動いているからだ。一惑星が〃行って〃しまうならば、他の惑星群もバランスを失って投げ出されるだろう。これは自然の法則にもとづいているのである。ちょうどハカリのようなもので、両方の皿に等しい重量の物を載せるとバランスがとれる。しかし片方の物体を取り去るとハカリ全体がバランスを失ってしまう。宇宙船は大気圏外と同様、水中にもぐることができる。このことは多くの目撃例において宇宙船が水中から飛び出て空中に消えて行った事例の理由を明らかにする。また宇宙船は地震や火山の爆発の前後に見られたと報告されている。私の知る限りでは、宇宙船の研究期間中に集めた最も技術的な資料は各国政府にも与えられているのである。ときどき新聞にそのような記事が出ることがある。地質学者や海洋学者も地球の海中で起こっている物事にもっと注意を払うようにと宇宙人の友からすすめられてきた。海中における宇宙船の活動は過去数十年間に益々大きくなっており、この惑星地球のみならず太陽系までが自然の変化をこうむりつつあることを実証しているのである。このことはきわめてゆっくりと確

実に起こっている。不思議な輪のような、または葉巻型の物体を含む水中活動の報告のなかには一八四五年にまでさかのぼるのもある。旧約聖書のヨナと大魚の物語もいうまでもなくこれに属する。ヨナはこの文明において最初に記録された水中活動物体の目撃を報告したばかりでなく、この巨大な潜水艦型宇宙船の乗員たちに実際に助けられたのである。（注＝ヨナはヘブライの予言者で、不信心のかどによって乗っていた船から海中に投げ込まれて〝大魚〟にのみ込まれたが、三日後に吐き出された）三日三晩彼はその宇宙船にとどまって知識を授けられた。そしてこの宇宙船を離れて後は以前よりもはるかに賢くなったと旧約に述べてある。この特殊な宇宙船は水中で活動できたばかりでなく、地上でも活動できた。その大魚は陸地へ上がってわが友ヨナを〝吐き出した〟からである。

ＵＦＯ研究家のなかには、これらの不思議な宇宙船はただ地球上の地図を作るために来るのだという人もあるが、これは地球へ来ている宇宙船団の数によっても完全に間違っていることがわかる。やろうとすれば非常に立派に装備された宇宙船一機だけで二、三週間以内にあらゆる地図作成をやりとげて、ホーム惑星へ帰り、地球上の地理学的変化が起こらぬ限り、たぶん一千年たっても再び地球へは来ないだろう。

さて私はこれから一八四五年にさかのぼって宇宙船の調査活動にふれてみたいと思う。

一八四五年六月十八日に二本マストの帆装船ビクトリア号の乗組員たちは、海中から出て来た三個の光る物体を目撃した。ビクトリア号の位置は北緯三六度四〇分五六秒、東経一三度四四分三六秒であった。

一八七〇年三月二十二日には三本マストの帆船〝湖の乙女〟号の船長が、円盤型の物体を航海日誌に報告している。これは色が明るいグレーで、二〇度から八〇度にかけて飛び、そのあと北東へ向かった。全乗組員もその物体が夕闇のなかに消えるのを目撃した。〝湖の乙女〟号の位置は北緯五度四七分、西経二七度五二分であった。

一八七九年五月十五日には不思議な水中の光体群が、英国軍艦ヴァルチャー号の乗組将兵に観察された。事件当時のヴァルチャー号の位置はペルシャ湾である。時刻は午後九時四十分。艦長は水中を高速で動く光体の脈動に気づいた。その物体群は巨大な回転する〝輪〟に似ていた。それらは当時就航していたいかなる船よりもはるかに高速で水中を進行したのである。

一八八五年二月二十四日、三本マストの帆船、イナリッチ号の乗組員が驚くべき現象を報告した。この帆船の位置は横浜とビクトリアのあいだ、北緯三七度、東経一七〇度の地点であった。船長は空が火のように赤いのに気づいた。あたかも巨大な火のかたまりが船に接近しているかに見えるのだ。突然この火のような物体が海中に突込んで、イナリッチ号は逆巻く波にゆられた。

これと同じような事件が二年後に英国汽船サイベリアン号の士官たちによって報告された。巨大な火の玉がケープレース（注＝ニューファウンドランドの南東端の岬）付近の海中から飛び出たのである。ミーティャロジカル・ジャーナル誌に出た彼の報告中で、彼は以前にも同じ地点で似たような物を見たことがあるとつけ加えている。

一八九一年十月にはシナ海で光線（複数）が観察された。これは一通信員によって一八九一年度発行ラストロノミー誌三一二ページに載せられた。その光線群はサーチライトのような状態であったと述べている。

一九〇七年三月十四日。汽船デルタ号の士官連は車輪のスポークのように、中心部の周囲を動くように見えるシャフト（複数）を観測した。それらは約三百ヤードの長さがあるように見えた上、約三十分間見られて、突然消えてしまった。デルタ号はその時までに約七マイル進行していた。

一九〇九年六月十九日午前三時に、ビンテーヴ号上から水面上に巨大な光の輪がゲーブ船長や乗組員たちによって観測された。これはマラッカ海峡で発生した。船長の報告によればこの物体は長いアーム（複数）を有していて、それが中心部から突き出て回転しているように見えたという。一同はこの巨大な車輪型物体が前方へ動いてその回転スピードと輝度が減少するのを見たが、突然消えてしまった。一年後の一九一〇年八月十二日に南シナ海で、オランダ汽船ヴァレンティン号の船長が、真夜中に水平型の車輪のように見える回転光体（複数）が海上を急速に転回するのを目撃した。

一九四三年にはペルシャ湾の海面下にアメリカ船の一水兵が巨大な円盤を見た。この物体は柔らかい緑色の光を帯びて輝いていた。この米国軍艦の前方にあった〝車輪〟は突然スピードを増して視界から消え去った。それより二十年以上も後になってウッズ・ホール海洋学会派遣の米国の一調査船の乗組員たちが、プエルトリコの海域で全く異常な体験を持ったのである。この船は三万フィートの海中に音波を記録したのだ。同船がキャッチした音響は海面下三万フィートの個所に毎分一八〇回転でまわっているスクリューの音のようなものであった。調査船はエンジンを切って、同海域にいた他の艦船にもエンジンを切るようにと信号を発した。こうしてあらゆる音響を排除してから科学者団は注意深く耳を澄ませた。しかし例の音響はやはり一八〇回転で音を出していて、海面下三万フィートの深海から響いて来るのだ！　水深三万フィートの所に存在するすさまじい水圧を想像しようとしても無駄であろう。しかしその深海に何がいたにしても、現在の地上の技術をはるかに越えたものである。それは太西洋の最も深い海底の割れ目にひそんでいた宇宙船なのであった。

われわれは海底地震の方が地上の地震よりも多いことを知っているが、これは海洋の部分が地球表面の七〇パーセント以上を占めているからである。海底で発生するいかなる自然の変化でもわれわれにはきわめて重要であるが、わずかな調査船や三万フィートも潜水できる深海用探険船でも調査仕事は不可能である。しかるに、近隣の惑星群から来た訪問者たちは、太陽系内の他の惑星群ばかりでなく地球の状態に関する貴重な知識を求めて海底を探索しているのである。彼らは万物と同様に太陽系も誕生と活動と崩壊の時期を経ることをよく知っているのだ。

われわれの太陽系も古びているのであって、早晩崩壊するであろう。やがては、かつて十二個の惑星やその衛星群を形成していたのと同じ原子が、別な太陽系を形成するために用いられるだろう。その過程はあらためてくり返されるだろう。イエスキリストが次のように言ったのはこの事に言及したものと思われる。「天と地とは過ぎ去るだろう。そして新しい天地がかわってできるだろう」この偉大な教師は大自然の不滅の法則、原因と結果の法則を知っていたのである。

以上のような友好的な惑星間宇宙船の水中活動についてはいくらでも書けるが、前にも述べたように、本書は彼らの生き方と来訪の目的を扱うもので、「なぜ彼らは来るのか？」が基本的なテーマである。

ところで十四世紀にさかのぼる多数の目撃事件に関して関心のある研究者用のすぐれた書物を推せんしたい。これはデスモンド・レズリーが集めた記録で、その書物の題は Flying Saucers Have Landed（邦訳版〝空飛ぶ円盤実見記〟高文社刊）といい、この書の後の部分にはアダムスキー氏が一九五二年十一月二十日にケアリフォルニアのモハービ砂漠で金星から来た人と会見した模様が述べてある。この書はニューヨーク市のブリティッシュ・ブック・センターで入手できるし、真実に直面することを恐れない人の書棚に置かれるべきものである。名高いことわざがある。「真理を知れ。そうすれば真理はあなたを自由にするだろう」

各種の雑誌や新聞のなかには宇宙からの訪問者が地球人に敵対行為を働いたと報じたのもあるが、このような報告は事実とははるかに遠いものである。これは反対派（注＝円盤の否定論者側）がわれわれにそのように信じさせようとしていることなのだ。われわれはこのような報告にだまされないような感覚を持つべきである。これまでに行なわれた敵対行為とは地球人が宇宙人に対してやったことなのである。五〇年代の始めに米空軍はＵＦＯを見たら射ち落とせという命令を発した。そしてみずからの無知のために恐れた一般人も同じことをやった。たしかに円盤が地上低く停止してネガティブのフォースフィールドを放っているときに、あまり接近しすぎてケガをした人がいることはいる。しかし飛行機のプロペラが廻っているときに接近しすぎてケガをすることもあるということを忘れてはいけない。しかもこの場合、パイロットが敵意を持っていたわけでない。

空軍は着陸した円盤のパワーがオフになっているときですら、近寄るなといっている。空軍は近寄って行った人が円盤の乗員から多くの事柄を教わるのを恐れているのかもしれない。私は断言するが、円盤が着陸してパワーやフォースフィールドがオフになっている限り危険はない。もし乗員が円盤から出て来て、機内へ入れとすすめたらーたぶん内部を見せて少し話をしようとするのかもしれないーぜひその招待を受けることだ。船内で数時間で学びとれる多くの新しい事柄は、この世界で蓄積され教えられたあらゆる既成の知識や理論よりもはるかに有益なものとなるだろう。宇宙人側のあらゆる分野の科学や生活の哲学の知識はすばらしいものである。学び取ることに熱心な人ならば乗船のチャンスをのがしてはならない。それは二度とないだろうからー。

宇宙人はたしかにわれわれの兄である。「恐怖それ自体以外に恐怖すべきものはない」のだ。

この世界にでき上がっている劣悪な経済状態のために、誤った経済を再確立しようとして戦争が行なわれる。われわれは完全な非武装に関して多くの議論を聞いてきたが、それらは完全な経済上の失敗となるだけで、かつてないような混乱を生じる。しかしこれは人間を殺してよいという弁解にはならない。殺人行為はーただ金のためにのみ人間の生命を奪うのだがーむしろ原始的である。われわれは自分をこの地球上で最高の知性と称しているが、しかるに最も原始的なやり方で生きていて、利己的な利欲のために戦争や破壊を行なうのである。この場合、動物が人間よりも高い知性を示している。動物は判断のためでなくサービスのために感覚を用いているからだ。

この太陽系内の他の惑星群の人々は長いあいだ地球人のトラブルに気づいていた。彼らははるか昔にこのような障害を克服してしまったのだ。彼らは真の兄弟愛によってこの世界を一体化することや永久の平和をもたらして新しい宇宙的な社会を確立することでわれ

われを援助したがっている。しかし大抵の場合、われわれはこれまでに彼らの援助と忠告とを拒んできた。これはわれわれが株式市場を運営させ、経済を押し進めようとして世界各地でいまだに殺し合っているからである。これに関することわざがある。「破損がなければ製造もない」近隣の惑星群から来た男女はわれわれと一緒に働くだろうが、多数の人が望むように、われわれの〝かわりに〟やってくれるのではない。彼ら宇宙人は言う。「私たちはあなたがたに食物を差し上げることはできますが、それから利益を得るにはあなたがたが自分でそれを食べねばなりません」彼らはわれわれにかわって食物を食べることはできないのだ。一九五〇年代の始めに彼らは大挙して地球へ来たために、われわれにも大気圏外へ飛び出るようにと忠告した。というのは、こんなふうにしてわれわれは経済状態を新しい非営利方式にすることを学ぶかもしれないからである。今日数百万の人々が宇宙開発問題で働いている。爆弾や鉄砲を作るかわりに、彼らは大気圏外探索用の器機や重要な装置を作っている。学ぼうとする人は殺そうとはしないことを宇宙人は知っている。彼ら宇宙人はこの全く新しい困難な仕事（宇宙開発の仕事）においてわれわれを助けることによって、われわれが結局は無知とか過去のゴウマンな態度から脱却して生長することを望んでいる。アダムスキー氏は次のように言ったものだ。「われわれは自分自身の宇宙開発計画によって別な惑星へ行くのだ」

宇宙人の正体が何であろうとも、彼らは地球を訪れるために彼らの世界から来ることができるのでありそしてわれわれも宇宙へ出かけて彼らを訪問することができるのである。これこそわれわれの宇宙開発計画でやろうとしている事なのだ。ゆえにわれわれはこの訪問者に関して何か具体的な知識を持たねばならぬ。さもないと目に見えない標的を射ることになるだろう。しかもわれわれはこの具体的な知識を持っているのだ。というのは多くの国々がその知識を授けられているからである。宇宙人は国家間や国の政治形態等を差別しない。彼らはあらゆる話には常に二面があること、それが人々を混乱させるために宣伝によってゆがめられてきたことを知っている。

政府の科学者が人間の生命がすでに大気圏外で失われてきたと言明するのを何度も聞いたことがある。これはウソだ!! ジェミニにせよウォストークにせよ、地球の宇宙船が大気圏外へ出た場合、必ず近隣惑星の人々の観察の的になるのである。宇宙飛行士たちが大気圏外にいるあいだに未確認物体から追跡されたという報告をしている。もしも宇宙飛行士の安全な帰還が危険になるほどに技術的な困難事が発生するならば、宇宙人たちが救出するだろう。これは確実に宇宙人によって保証されているのであって、各政府もこの事を知っていて認めているのである。もちろん一般大衆にではなく、或るサークル（複数）について認めているのだ！

一九四五年に始まった米国の原子力実験によって、完全に新しい時代が始まった。恐怖と学習の原子時代である。核爆発はときとして宇宙からの訪問者の安全な旅をひどく困難にし、しばしば危険にさえした。そのために宇宙人の宇宙船が米国南西部や他の国々に墜落することもあった。

地球の原爆実験によって宇宙人にとって大気圏外がいかに危険になるかを読者に見抜かせるために、この宇宙船たちが用いている推進方式を簡単に説明しよう。

これまで我々は二種類の宇宙船がもっともよく知られたもので宇宙人によって用いられていることを知っている。まず葉巻型宇宙船があり、これには長さ数百メートルのものから数チフィトー、数マイ

ルのものさえもあり、電磁理論に基づいて作動する。彼らは宇宙空間に遍満する力（数）を利用するのである。母船群は惑星間航行のために建造されるのである。

次に円型の台皿型宇宙機があり、これは三種類の大きさがあって、大体に直径が三〇、六〇、九〇フィートある。〝偵察機〟と呼ばれるこの宇宙機は常に惑星の大気圏内で静電気の諸理論に基づいて作動するが、その静電気は惑星の周囲の大気内で起こされる。たとえば雷雨中の稲妻は眼に見える静電気の働きである。これらの宇宙機はこれと同じフリーエネルギーを利用するのであって、どの惑星の周囲にも見出されるものである。この偵察機は巨大な母船すなわち輸送船の腹の中に収容して、惑星間を運ばれるのである。

この静電気のエネルギーや電磁気が宇宙人によって利用される様子について深い興味を持つ読者は、ジョージ・アダムスキーの書いた Flying Saucers Farewell（邦訳〝空飛ぶ円盤の真相〟角文社刊）を読めばよい。

さて元の問題に返ることにしよう。地球の大気圏核爆発テストがあの進歩した他の惑星の乗物にどのような影響を与えるかという問題である。読者は次の記事を読めば驚くだろう。

〔ワシントンポスト紙、一九六六年二月七日付〕

振動が核爆発に手がかりを与えている

ケァリフォルニア州パサデナのケァリフォルニア工科大学地震研究所の科学者団は次のような声明を発した。

「空中の核爆発は一時間の間鉢一杯のジェリーのような震動を起こす。この震動は四、五秒ごとに一回の割で地球の磁場を形成する不可視の〝磁力線〟に沿って波動となって動く」

この報告は一九六二年七月九日に太平洋のジョンソン島の二四〇マイル上空で行なわれた核爆発後に地球物理学者のアリ・ベン・メナヘムとロバート・L・クヴァッチによる研究の要約である。その爆発があたかも地球の磁場の弦をひくかのようであったとベン・メナハム博士は言っている。

磁力線は地球の両極間で空間の方向へ弓状をなしている。ところが核爆発によってこの磁力線がまるでバイオリンの弧のような震動を起こしたのだ！この弦の運動が、近接したガスの荷電微粒子をしてその震動に加わらしめるのである。

この声明や、また宇宙船が磁力線に依存している事実を考えれば宇宙船に対して地球人がいかに危険なことをやってきたかは想像に難くない。核爆発の直後は宇宙船に対して非常に危険であるばかりでなく、そのかく乱はゆっくりと遠い宇宙空間に拡がってゆき、われわれの狭い知識では理解できないような何かの変化を起こすのである。どの爆発も地球上にも異常なかく乱と状態とを増大するのであって、それはわれわれが経験ずみだ。それにもかかわらず他の惑星から来る友は彼らの宇宙船をためらわずに改造した。そして或る種の危険防止策を講じてから彼らは数機の編隊で実験場の上空へやって来たのである。一九四〇年代の終り頃の或る日ニューメキシコ州ファーミントン上空に、五百機以上の宇宙船が多数の人々に目撃されたが、そのなかには官憲もいた。ニューメキシコは米国の原子力装置の初期の実験場であった。官憲はもちろんこの宇宙人によるすさまじいデモンストレーションを高く飛ぶ〝綿の実〟だと説明しようとした。しかし官憲がわれわれに何を信じさせようとしたところでそんなことにおかまいなく、宇宙船は現在地球へ来ているのであ

って、しかもその数はふえているのである。しかし米空軍へ入って来る目撃報告は初期の頃よりも今は減少している。明らかにこれは無数のＵＦＯに関する一般の不信が続いた結果である。二十年もたったのに空軍が別な惑星から来る宇宙船の正体をつかめないというのなら、一般市民は真実の解答を得ることはあきらめるほうがよいだろう。一方大衆はこの件に関しては自分で考えるほどに進歩しているのである。

読者はこの章で核実験に言及したからといって誤解してはいけない。というのは、この原子力時代に起こってきた恐怖や不安にかかわらず、核実験は進歩のためにわれわれが支払わねばならない代価なのである。すなわち近い将来に建設的な目的のために原子力の利用法を学ぶことのできるような進歩のためである。われわれは今から五十年後にはこの恐怖の時代を脱却して生長しているだろう。その頃にはわれわれは、現在制御法を知らぬままに原子の〃皮むき〃をやってエネルギーを開発して大気圏内に余波を作り出したりするかわりに、自然の自由エネルギーを用いるようになっているだろう。この太陽系内の他の十一個の惑星に住む人々は、大自然の建築ブロックである原子をその自然の状態で利用しているのであって、建設的な面で遠い過去からそうしてきたのである。

私は宇宙船の来訪の最も重要な要素と〃なぜ彼らは来るのか〃について説明したい。

一九三九年の秋における太陽系の数個の惑星の会合（注＝天文学用語）の徴候と共に、〃聖書の予言〃が実現しつつあった。二千年の周期が終わったのである。世界の教会はこの事実に気づいて、各種の宗教を統一するための第一段階を開始した。そして今やゆっくりと、しかも確実に、教会は別な惑星の人々の来訪に関する声明を洩らしつつあるのである。「大いなる力と大いなる栄光とをもって雲に乗ってやって来る神の子たち！」ときとして時速一万八千マイルのスピードで空中を動く〃雲〃とは宇宙船のことなのであって、イオン化空気のフォースフィールドに包まれており、そのために白っぽいタマゴ型の雲のような外観を呈するのである。（以下次号）

〔筆者フレッド・ステックリング紹介〕

フレッド・ステックリングはドイツのベルリンで生まれ育った。幼少の頃から科学に興味を持ち、十六才の時に飛行機やグライダーの操縦を習い始めた。大空に大いなる憧れを抱いてこの方面に生涯を捧げる決心をしていたが、家庭の経済事情のために進学を断念して、やむなくホテル業界へ身を投じた。

十八才の時にカナダへ移住し、その後米国へ移動して市民権を取った上でホテルのショフとして働きながらジョージ・アダムスキーに師事してＵＦＯ問題や宇宙哲学の研究に没頭した。彼はブラザーズ（他の惑星から来た兄弟）とコンタクトしているといわれており、そのことはこの連載記事に詳述される予定であるが、特に数年前に故郷のドイツへ帰省した折、列車の窓から空中を飛ぶ円盤を８ミリ映画に撮影して米国でセンセーションをまき起こした。生前のアダムスキーをよく知る人物として重要な存在であり、今後も世界ＧＡＰの発展のために指導的役割を演じる人として注目されている。

昨年秋にはメキシコから編者宛に手紙をよこしたが、現在もそこにいるかどうかは不明である。

彼の原書は昨秋発注してかなり以前に入手していたものである。原文は平易な英文で書かれて読みやすく、シャーロット・ブロックが序文を書いている。ニューヨークの書店から発行された。

前述のとおり、彼がドイツで撮影したというUFO映画はすばらしいものだと聞いているが、このフィルムを借り出すのは困難だと思われる。しかし究極において写真という証拠物件はさほど有効ではないようである。どんなに迫真の実写写真を見せても、信じようとしない人はアタマから否定してかかるし、信ずる人は写真など見なくても記事の分析だけで信ずるからである。そのことはアダムスキー、スティーヴン・ダービシャー少年その他一連の撮影者の写真によってイヤというほど示されてきた。ここでビリーフ（信ずること）の意味の重大さが浮かび上がってくる。同じ人間でありながら不可視の神を信ずる人と信じない人とに分かれるのは一体どうしたわけなのか？

次に問題となるのはコンタクティーの学歴である。アダムスキーを始めとしてステックリングその他の人々は学歴のない無名人であった。このためアダムスキーは当初無学者扱いされて、きわめて不利な立場におかされたのである。無学歴の人を軽視するのは世界共通の傾向であるが、日本では特にその傾向が強くて、編者がアダムスキーの紹介活動を始めた十数年前は、彼を攻撃するのにこの無学歴がしきりに利用されて、そのため彼はハンバーグの行商人だとかコックなどにされた。これは事実無根である。

無学歴と無学が別物であることは論をまたない。また学校教育を受けられなかった不幸な人々を軽視するような人は、きわめて未発達な人間であるがゆえに本人は学校で教育を受けるという羽目におちいったのであるから、もって反省すべきであろう。編者は学校教育が不要だというのではなく、万人が平等に教育をうけて能力を開発できる理想的な世界のあり方を論ずるのである。しかし悲観は禁物である。世界は着実にその方向にむかって前進しているのだ。

（編者）

絶賛刊行中　**超相対性理論**　村雨光之助著　Ｂ5版・247頁　¥500・〒100

円盤の動力の解析とタイムマシンの定式化！

内　容　(1)全角運動量波方程式　(2)相対論的球関数　(3)誘電分極量子演算子　(4)清家クラマス方程式　(5)状態運動量の従う方程式　(6)超光速ロレンツ変換　(7)多重調和方程式　(8)重力直接発電（重力エネルギ密度、統計熱力学的確率、ロック磁場、出力電圧、発電容量、実験結果）　(9)反粒子機関（＝円盤）（反粒子の重力場、反粒子機関の推力と出力）　(10)時間反転機（＝タイムマシン＝航時機）　(11)付録　(A) 4次元数学諸公式　(B)懐しのメロディー　(C)研究を開く言葉（和歌、漢詩、小説、各言）

申込先・798愛媛県宇和島市大宮町1丁目4番12号　清家新一（宛）

＊現金書留・小切手可　郵券不可

◎詳細資料御希望の方は〒25同封、著者宛申込まれたい。

新刊　**空飛ぶ円盤とアダムスキー**
－死と空間を超えて－　久保田八郎編　新書版　¥480　〒85

かつて日本GAPが刊行した「死と谷間を超えて」が絶賛りに品切れとなり、再版が待たれていたところ、有信堂高文社よりアダムスキーシリーズの一環として上記の題で刊行された。金星旅行記や土星旅行記等を含む驚異的な体験記類と宇宙哲学の論説、日本GAP代表久保田八郎宛てにアダムスキーの数十通の書簡全部を公開。研究家必携の書。御注文は必ず有信堂高文社へ（113－91東京都文京区本郷5－30－20）または書店へ。

新刊　**生命の科学**　Ｂ6版・170頁　¥420〒55

Ｇ．アダムスキー著

発行所
東京都文京区白山1－29－12．文久書林

これもかつて日本GAPでタイプ印刷本を発行して大好評を博した結果、文久書林より本格的活版印刷の単行本として新装刊行された。Ｇ．アダムスキーが宇宙のブラザーズから伝えられた人間の生き方を十二課に分けて説いた万人必読の書。現代の聖書であり、これを読んで生活に実践すれば奇跡が生じるといわれる。同書林発行のアダムスキー著「テレパシー」の姉妹編としてあなたの書架へぜひ一冊を。御注文は必ず直接文久書林へどうぞ。

再刊決定！**宇宙哲学**　10月に出る！
Ｇ．アダムスキー著　Ｂ6・200頁　¥350　〒55

久しく絶版となっていたこの書が今秋10月にたま出版より本格的単行本として刊行されることになった。アダムスキー哲学の中心をなす重要な書であるから研究家はぜひ一冊入手されたい。訳文は徹底的に校訂した。予約注文は必ずたま出版へ。

◎発行所＝東京都新宿区納戸町33　西応ビル内　たま出版
予約受付開始！

日本ＧＡＰニューズレター旧号

次のもの在庫あり。ご注文は東京都江戸川区篠崎6－231、日本GAP宛にされたい。第34、35号（以上各130円）第36、37、39、40、41号（以上各150円。送料は一切不要。第38号は品切れ。）

市村俊彦著
テレパシー論

テレパシー、透視、千里眼、予感、予知、念写、思念写真その他の超心理現象を研究するまじめな書で、この方面に関心ある人には必読の参考書。
主宰者市村俊彦氏は物理学者であって、超心理を科学的に解明しようとされるすぐれた研究家である。

◎1部定価300円。送料55円。
◎発行所＝905－02新潟県中蒲原郡横越村横越　超心理研究会

－隔月刊誌－　**たま**

21世紀の文明のあり方を目指して物心両面から人間の生き方を追求し、覚醒への警鐘を打ち鳴らして、宇宙意識への道標と旗印を掲げんとするパイオニア一誌。特に第13号より久保田代表の〃宇宙意識開発講座〃が連載され好評を博している。
◎発行所＝東京都新宿区納戸町33、西応ビル内　たま出版
◎1部送料共135円。年間720円。

日本ＧＡＰ大阪支部大会開催!!

日本ＧＡＰ大阪支部結成満一周年を記念して今回左記のように「日本ＧＡＰ大阪支部大会」を開催致します。関西地方の会員の方はふるって御参加下さい

（会場位置については裏面の21頁を参照のこと。）

◎日　時　八月十六日（第三日曜日）午前十時より午後四時まで。

◎場　所　大阪婦人会館（大阪市東区上町二番地。
　　電話　大阪（〇六）七六二一二六五八）

◎会　費　三百円（当日の会場費とする。昼食代は含まない）

◎昼　食　各自でとること（会館地下に食堂がある）。

プログラム

〔午前の部〕

1.市川大阪支部代表挨拶

2.巽直道氏講演（但し録音）
「思念力の効果」・・・・・・・　30分

3.久保田日本ＧＡＰ代表講演
「ＧＡＰの活動について」・・・1時間30分

－　昼食休憩１時間　－

〔午後の部〕

4.円盤スライド上映　・・・・・・1時間

5.出席者全員自己紹介　・・・・・30分

6.質疑応答・座談会　・・・・・・1時間30分

7.記念撮影

8.久保田代表挨拶

9.市川大阪支部代表挨拶

以　上

表紙写真解説

左側がありし日のアダムスキー，右側がロチェスターの〝勇気ある男〟ウィリアム・Ｔ・シャーウッドである。シャーウッドはコダック社の技術関係幹部で，ロチェスター大学物理科出身。同級生にもとケァリフォルニア工科大学学長で現在ニクソン大統領の科学顧問のデュー・ブリッジがおり，これがアダムスキー問題を米政府に鼓吹しているという。この写真は４月８日付でシャーウッドから編者に贈られたもの。

絶賛刊行中　**超相対性理論**　村雨光之助著　Ｂ5版・247頁　¥500・〒100

円盤の動力の解析とタイムマシンの定式化！

内　容　(1)全角運動量波方程式　(2)相対論的球関数　(3)誘電分極量子演算子　(4)清家クラマス方程式　(5)状態運動量の従う方程式　(6)超光速ローレンツ変換　(7)多重調和方程式　(8)重力直接発電（重力エネルギ密度、統計熱力学的確率、ロック磁場、出力電圧、発電容量、実験結果）　(9)反粒子機関（＝円盤）（反粒子の重力場、反粒子機関の推力と出力）　(10)時間反転機（＝タイムマシン＝航時機）　(11)付録　(A)4次元数学諸公式　(B)懐しのメロディー　(C)研究を開く言葉（和歌、漢詩、小説、各言）

申込先・798愛媛県宇和島市大宮町1丁目4番12号　清家新一（宛）

※現金書留・小切手可　郵券不可

◎詳細資料御希望の方は〒25同封、著者宛申込まれたい。

新刊　**空飛ぶ円盤とアダムスキー**
－死と空間を超えて－　久保田八郎編　新書版　¥480　〒85

かつて日本ＧＡＰが刊行した「死と谷間を超えて」が絶賛りに品切れとなり、再版が待たれていたところ、有信堂高文社よりアダムスキーシリーズの一環として上記の題で刊行された。金星旅行記や土星旅行記等を含む驚異的な体験記類と宇宙哲学の論説、日本ＧＡＰ代表久保田八郎宛てにアダムスキーの数十通の書簡全部を公開。研究家必携の書。御注文は必ず有信堂高文社へ（113－91東京都文京区本郷5－30－20）または書店へ。

新刊　**生命の科学**　Ｂ6版・170頁　¥420〒55

Ｇ．アダムスキー著

発行所
東京都文京区白山1－29－12．文久書林

これもかつて日本ＧＡＰでタイプ印刷本を発行して大好評を博した結果、文久書林より本格的活版印刷の単行本として新装刊行された。Ｇ．アダムスキーが宇宙のブラザーズから伝えられた人間の生き方を十二課に分けて説いた万人必読の書。現代の聖書であり、これを読んで生活に実践すれば奇跡が生じるといわれる。同書林発行のアダムスキー著「テレパシー」の姉妹編としてあなたの書架へぜひ一冊を。御注文は必ず直接文久書林へどうぞ。

再刊決定！**宇宙哲学**　10月に出る！
Ｇ．アダムスキー著　Ｂ6・200頁　¥350　〒55

久しく絶版となっていたこの書が今秋10月にたま出版より本格的単行本として刊行されることになった。アダムスキー哲学の中心をなす重要な書であるから研究家はぜひ一冊入手されたい。訳文は徹底的に校訂した。予約注文は必ずたま出版へ。

◎発行所＝東京都新宿区納戸町33　西応ビル内　たま出版
予約受付開始！

日本ＧＡＰニューズレター旧号

次のもの在庫あり。ご注文は東京都江戸川区篠崎6－231、日本ＧＡＰ宛にされたい。第34、35号（以上各130円）第36、37、39、40、41号（以上各150円。送料は一切不要。第38号は品切れ。）

－隔月刊誌－　**た　　ま**

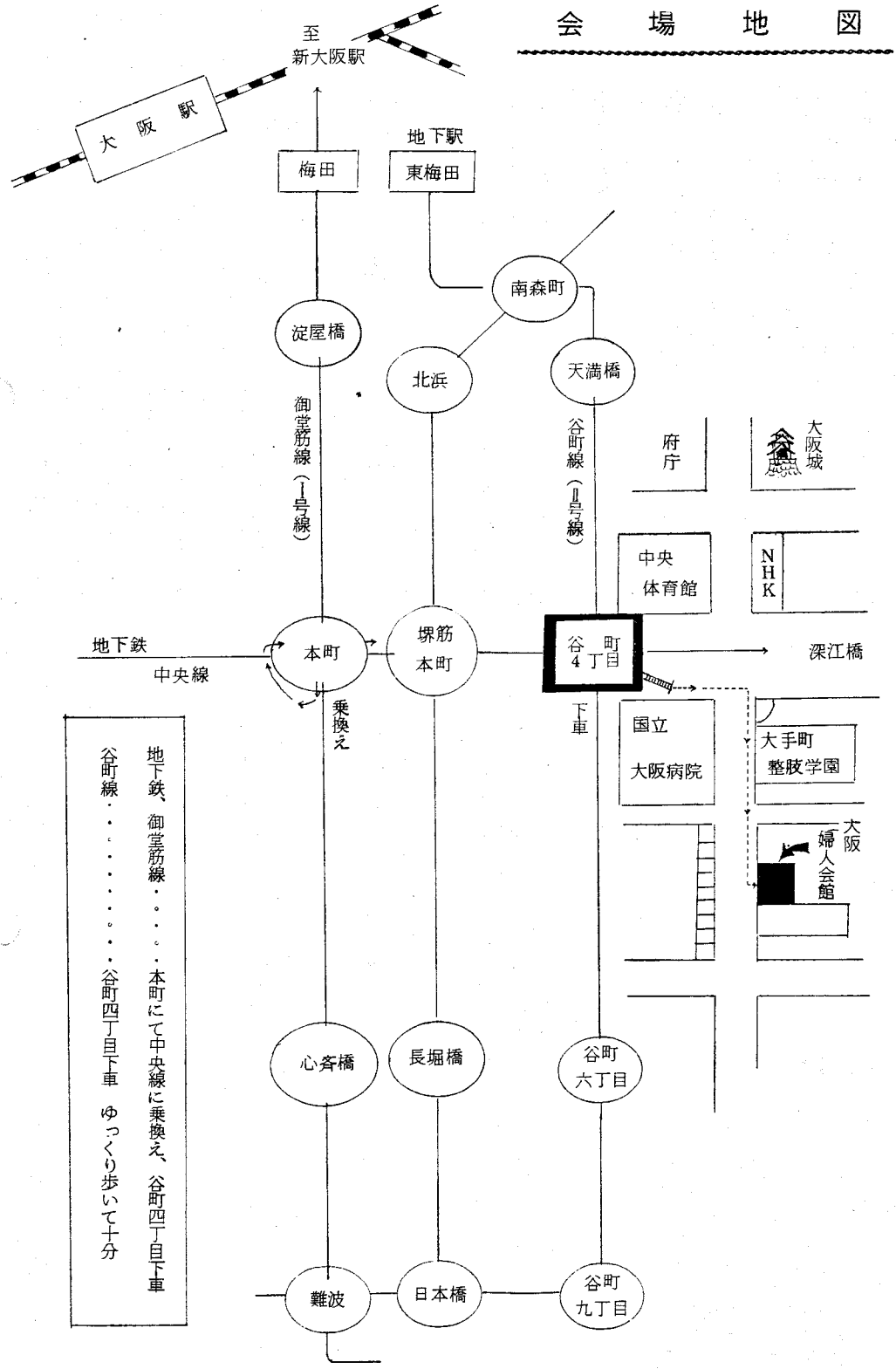
21世紀の文明のあり方を目指して物心両面から人間の生き方を追求し、覚醒への警鐘を打ち鳴らして、宇宙意識への道標と旗印を掲げんとするパイオニア一誌。特に第13号より久保田代表の〝宇宙意識開発講座〟が連載され好評を博している。
◎発行所＝東京都新宿区納戸町33、西応ビル内　たま出版
◎1部送料共135円。年間720円。

市村俊彦著
テレパシー論

テレパシー、透視、千里眼、予感、予知、念写、思念写真その他の超心理現象を研究するまじめな書で、この方面に関心ある人には必読の参考書。
主宰者市村俊彦氏は物理学者であって、超心理を科学的に解明しようとされるすぐれた研究家である。

◎1部定価300円。送料55円。
◎発行所＝905－02新潟県中蒲原郡横越村横越　超心理研究会

会　場　地　図



地下鉄、御堂筋線・・・・・本町にて中央線に乗換え、谷町四丁目下車
谷町線・・・・・・・・・谷町四丁目下車　ゆっくり歩いて十分

—編集後記—

あくるず・ぎ・ぐすく

◎ 本誌発行がひどく遅れて申訳ない。と弁解して片付く問題でもないが、この遅延は全く編者の日中勤務に起因する時間不足と資金不足に基づくもので意欲の喪失ではない、と何度も言うことだが、目下は足踏み状態。しかし状況改善の努力は続けたい。

◎ 本号から従来のタイプ印刷をオフセット印刷に切り換えて体裁を一新した。また題号を〝日本GAPニューズレター〟から〝コズミック ニューズレター〟に変更。一段と飛躍。メデタシ。これは藤原孝幸氏の御援助による。深謝。ただし物価高騰のため誌代値上げと頁数減少のやむなきに至る。乞御了承。コズミック・ニューズレターの略字はCNLとする。

◎ 従来発行の副機関誌〝宇宙通信〟は混乱防止のために廃止し、今後は再び本誌のみの一本立となる。ゆえにGAP宛の連絡はすべて直接編者宛にされたい。平日の編者宛電話は夜七時以後に限る。なお〝宇宙通信〟終刊号に添付されたアンケートは編者の関知しなかったことでGAPとは関係ないものである。

◎ 急告 !! 来たる八月十六日（日曜日）に日本GAP大阪支部主催の関西地区GAP大会を大阪市内で開催することに決定した。これは都内で開催する総会とは異なり、主として関西以西の会員の方々を対象とした会合であるから、ふるって参加されることを望む。当日は代表の講演、質疑応答、スライド映写等を企画している。詳細は本号20～21頁を参照のこと。

◎ アダムスキー著〝生命の科学〟は先般文久書林より本格的な単行本として刊行された。また〝宇宙哲学〟も久しく品切れとなっていたが、今秋十月に〝たま出版より単行本として出版されることになったのは喜ばしい。両出版社の関係者各位の深い御理解と御支援に心から感謝する次第である。詳細は19頁をごらんのほどを。未入手の方はぜひ一冊を備えられるようおすすめする。

◎ たま出版発行の求道誌〝たま〟に編者（久保田）執筆の〝宇宙意識開発講座〟が連載されているが、〝たま〟読者間に大好評を博しているとは同誌編集長の弁。アリガタヤ。これはもともと本誌に掲載するべきものを紙面不足のために〝たま〟へ提供したのであるから、本誌読者も一読されるならば幸いである。これも19頁にPR済。

◎ 東京におけるGAP月例研究会と大阪支部の月例研究会は確実に行なわれているので、地元の方々はふるって参加されたい。詳細は本誌第40号31頁に出ている。

◎ 毎月の月例研究会で話すことだが、GAP会員は集会の都度極力非常識な言動を避けるようにし、心あたたまるような美しい雰囲気をかもし出すように留意されることを衷心よりお願いしたい。他人を不愉快にするような感情的な言動は結局感覚の無さを暴露するだけで、いかに壮大な論文を書こうとも、全く無価値である。相手に対する揶揄、皮肉等は断固つつしんでいただきたい。けだしGAPは柔和にして精緻な感覚、清純にして親切な魂を持つ人々の集りを理想とするからである。

宇宙問題は重要であるが、その前にまず大地に足をしっかりとつけて、現実の問題に対処することが肝要である。そのためには周囲の環境や社会上の慣行を直視し、豊かな常識と礼儀とを身につけるべきであって、こうした基本的な感覚なしに宇宙哲学はあり得ない。

われわれが理想世界の確立を目指してさゝやかな努力を続けようとする場合、言動において特に他人の範となる必要がある。その意味で特に重要なのは「親しき中にも礼儀あり」の法則の実践である。道徳が（むしろ感覚が）地に落ちた現代の世において、GAPは宇宙の意識の使徒の集団でありたいと思う。

◎日本GAP本部の電話番号は（六七九）五三八六に変更。 注意 注意 （久）

コズミック ニューズレター

No. 42

昭和45年7月31日発行・不定期刊
翻訳編集発行人 久保田八郎
発行所 日本GAP
133 東京都江戸川区篠崎6－231
TEL (679)5386／振替東京35912(久保田名義)
頒価¥200／〒35
★禁無断転載